

テーマ賞

Moon Right 伊豆泥男

1 妹 船内居室女子区一六八

私には、兄さんの考えは到底理解できなかった。

私の二十年の人生は、幸せに満ちていた。食事にも、娯楽にも、教育にも、何一つ不自由しなかった。求めれば求めるだけ、月の神さまは与えてくれた。おかげで私は、争いとも貧困ともかけ離れたところで、健全な精神と肉体をはぐくむことができた。だから私たちには、月の神さまに感謝こそすれども、反抗する動機など、何一つないはずなのに。

どうして兄さんは、贅になることを拒むのだろう？

2 兄 船内第五食堂

「いやあ、ついに僕たちも、月の神さまの贅になれるんだね。嬉しいなあ、楽しみだなあ。ねえ、君もそう思うだろう？」
俺は窓の外を眺めながら、「まあ、そうだな」と心にもない返事をする。船の外に広がるのは、深い深い宇宙の闇。その中に、何年前に生まれたかもわからない星の光だけが、ポツリポツリと瞬いていた。

「なんだいなんだい。テンションが低いなあ。神さまに会えるんだぞ？ 僕たち地球人の、共通の夢だぞ？ もつと盛り上がった方がいいんじゃないか？」話しかけてきた同輩は、合成果汁の入ったカップを机に置いた。

確かに、月へ向かう船の中は、浮かれたやつらがほとんどだった。無理もないことだとは思う。俺を含めた地球に住む人類は皆、月の神に肉体を捧げることを至上として生きている。それが幸せだと教えられ育ってきたし、それを疑う者もいなかった。俺たちは神のために造られ、神のために育てられ、神のために今まさに、月へと運ばれているのだ。

俺は視線を窓から外し、愛想を作って彼の方を向く。

「……いや、十分盛り上がっているよ。俺があんまり感情を顔

に出さないのは知っているだろう？」

嘘だ。しかし俺の真つ赤な嘘を、彼はそうかそうかと疑いもせず受け入れた。そして何事もなかったかのように、別のメンバーとも喜びを分かち合おうと違うテーブルへと移った。

再び顔を窓に向ける。去っていった彼は俺の嘘を、一つの疑念もなく受け入れた。俺が苦手なのは、あの純真さだ。微生物すら生きられない澄んだ湖のような、空恐ろしい透明さ。どうあがいても俺は、ああは成れない。魂の色が違うとしか思えない。

だから俺は、死にたくない。他の地球人と違って、神の贄となつて死ぬことを、幸せだとは思えないのだ。確かに神は、俺たちに様々なものを与えてくれた。しかしそれでも、神のために死ぬ気は毛頭ないのだ。

改めて意思を固め、決意を再確認する。逃げてやる。神の手から逃げてやる。贄になぞなつてたまるものか。

勝負は三日後、この船が月に着陸する時だ。月の大気圏突入の瞬間この船には電波障害が発生し、地球とも月とも連絡が取れなくなる。その一瞬の隙を付くのだ。

絶対に逃げてやる。そして何より、絶対に逃がしてやる。哀れにも神の贄となることを望んでいる、愚かな愚かな妹を――

3 妹 船内居室女子区一六八

西暦二千年代と違って、今の地球人は二十年でその生涯を終える。地球で生まれた人間は、どうあがいてもそれ以上は生きられない。二十歳を超えた人間は、月の神さまにその肉体をお返ししなくてはいけないのだ。いわばこれは等価交換。二十年間不自由なく生きられる代わりに、それ以降は月の神さまの好きにされるのだ。

地球人はみんな、それでいいと考えていた。昔よりも寿命は短くなったが、しかし濃密な時間を過ごせるのだから。神さまが私たちに求めるのは、健康な肉体と健全な精神である。そのため私たちには、十分な食事、適度な運動、適切な教育、過不足ないストレスが与えられる。そうして二十歳まで育てられた私たちに、月の神さまたちは自身の記憶を移すのだ。

私たちには理解できないことだが、神さまは不老不死を求めているらしい。永遠に、万全の肉体のまま生きながらえたいと考えているらしい。私たち地球人は、そのための器なのだ。神さまが永久を生きるために乗り継ぐ、使い捨ての一つに過ぎないのだ。しかし、私たちはそれでいいと思っている。神さまが生きたいと思ったからこそ、私たちは生み出されたのだ。もし神さまが死を受け入れる存在だったのなら、私たち地球人は生まれることもない。だから私たちは、神さまの営みの中の一部となれることを喜び、誇りに思うべきなのだ。

しかしそれでも、兄さんは譲らない。

4 兄 船内居室男子区六五―

「思ってたより警備ザルっスよ。これなら脱出も、案外簡単かもしれないせん」

簡単な机と椅子、ベッドしかない独房のような居室。そのベッド下からひよっこりと顔を出したユダは、偵察の結果をそう報告した。まだ船が出航してから一日も経っていないのに、この広大な船内をあらかじめ把握したようだ。忍者のような奴である。だからこそ、まだ二十歳にもなっていない彼をこの船に密航させたのだが。

「ただまあそれはあくまで、脱出するのがボクとセンパイだけならの話っス。妹さんを説得して連れていくというなら状況は変わってくるっス。月に突入する際に通信が遮断される時間は、大体三十分程度でしょう。そんな短い時間で、女子区まで行くのは、あまり現実的とは言えないっスね」

「三十分か……確かにそれだと難しいかもしれない。ザルと言った船内の警備は、具体的にはどんな感じだ？」

「船内に侵入する前は、もつと警備ロボットがうようよしてると思ってたんぞけどね。操縦室前くらいにしかいませんでしたよ。カメラさえ何とかすれば、自由に行動できます」

ユダはさすがにいつまでもベッドの下に隠れているのも窮屈だと感じたのか、するりと抜け出し椅子に座る。そしてベッドに腰を掛けている俺と、目線を合わせた。居室の監視カメラには、ダミーの映像を挟み込んであるので安心だ。

「そもそも月の神たちは、地球人が脱走したり反乱を起こしたりすることを、はなから考えていないように感じましたね」

考えてみれば、それもむべなるかなというものだろう。地球の人類は全て、二十歳で神に命と体を捧げることを使命として生きている。そんな彼らが神に逆らうことは、まずありえない。そんな低い確率に力を割くのは合理的ではないのだろう。そしてそれは俺たちにとつては、チャンスだ。

「それなら、念のためと持ち込んだジャミング装置があったらう。あれを船の通信拠点に設置しよう。守りが薄いなら簡単だろう。通信を妨害して、自由に動ける時間を三十分から一時間にまで伸ばすんだ」

俺の言葉に、ユダは目を丸くし口をぽかんと開けた。

「正気っスか。持ってきたジャミングは、あくまで小型の携帯端末とか監視カメラにしか使えないやつっスよ。到底こんな大型船のぶつとい通信を遮るなんて……」

「応用すればできないことはない。船自体の機能に介入して、侵食して妨害するんだ」

「その応用が大変だつて言ってるんすよ。手持ちのを改造するにしたつて、必要な部品が多すぎるっス。いくら手先の器用なセンパイだつて、モノがなければ何も……ハッ、もしかして」

「ユダは何かに感づいたようで、勘弁してくれというような表情になる。」

「そのもしかして、だ。君にはこの船を駆け回って、その必要な部品を集めてきてもらいたい。疑似重力場発生装置をはじめ、この船には高度な技術が至る所に使われている。そこからいろいろ、くすねてきてほしい」

「無茶言いますね先輩。そもそもボクは、本来この船にいないはずの人間なんスよ？ そんなに大々的に動けないことは分かっていますよね？ しかも三日しかないんですよ？ 優秀なボクでも、出来ることとできないことがあるっス」

大きなため息をついたユダは、俺の目をじっと見つめて、言う。

「そんなに、妹さんを逃がしたいんスか？」

突然投げかけられた根本的な問いかけに、一瞬言葉に詰まる。その隙をつき、ユダは重ねて畳みかける。

「だって妹さんは、逃げたいと思っていないんでしょう？ ボクやセンパイと違って、神に肉体を捧げることに疑問を感じていないんでしょう？ だったら、助けなくてよくないですか。そのまま神のものになった方が、幸せだとボクは思うんですが――」

一瞬何も言えなくなってしまう俺だったが、しかし、その言葉だけは聞き捨てならなかった。

「そんなことはない。神のものになった方が幸せだなんて、そんなことは絶対にない。例え神に心酔している者だろうとも、自分の意志でなく死んでいくなんで、そんなことは絶対に許されない」

二十年連れ添った俺にはわかる。妹は、自ら好き好んで死に行くのではない。ただただ、それが決まりだから、周りがそうするから、神に自分を捧げようとしている。そこに妹の自由意志は、ほとんど存在しない。

「だから俺は、妹も助ける。できるなら、他の意思なく死んでいく奴らも助けてやりたいが、脱出できるのは全部で三人が限界だろう。だから、逃げ出す意思のある君と、俺の最も大切な人間である妹と一緒に、神の手から逃れたいんだ」

俺の弁に、ユダは根負けしたようで

「あーわかりましたよ！ センパイが一度決めたら曲げない人だってことは、二年前に知り合ったときから知っています。だからこそ、そんなセンパイと一緒に逃げたいから、一年前倒してこの船に乗ったんです」

面と向かって言われると、さすがに俺も赤面してしまう。協力者となる人間を探し出し、無理を言って連れてきたのは、間違いはなかったのだと感じた。

「じゃあ、とりあえず月到着までの三日間、ボクはジャミング魔改造のための部品を集めるっス。先輩は脱出のための算段を立てると、装置の組み立てをするって感じでいいんすね」

「ああ。よろしく」

「まったく！ こんな無茶につきあう後輩は、地球にも月にもボク以外いませんからね！ そこしつかり覚えておくように！」

そう言い切るとユダは、俺の股下をすりと通り、ベッドの下に潜り込んだ。おそらくどこかの小さな通路や通気口に繋がっているのだろう。本当に忍者かスパイのような奴である。

ユダは作戦を考えることと、装置の組み立てることが俺の仕事だと言ったが、もう一つしなくてはいけないことがある。それは、妹の説得について考えることである。

あの、自分の命について、なんの執着もない愚かな妹を、俺はどう説得すればよいのだろうか。どうすれば彼女に、自分の意思を持たせることができるのだろうか。彼女は自分の口から、「生きたい」と言ってくれるのだろうか。

すぐに答えが出る問いでもない。今日は情報収集で疲れた。宇宙船には昼も夜もないが、しかし窓の外は真つ暗だ。作戦前に睡眠をとることも悪くないだろう。俺はそのままベッドに倒れこみ、間もなく寝息を立てた。

5 妹 船内居室女子区一六八

もう後一時間もすれば、この船は月に到着する。遂に神さまに、この身を捧げられるのだ。それは私たち地球人の悲願であ

り、この上ない喜びである。——はずなのだが。

人生を円満に終了させる直前になっても、いまだに私の心にはしこりが残っていた。兄さんのことである。あの兄はやはり、神さまに殺されたくはないらしい。「自分の生き方と死に方くらいは、自分で決めたい」それが兄さんの、昔からの口癖であった。今でも兄は曲がらない。

私には兄が分からない。自分で決めたら、そこには必ず責任が付きまとう。責任は、重い。兄さんはその重さに鈍感なだけなのだ。何かを選ぶということは、何かを選ばないことでもあるのだ。その選ばれなかった可能性の集積が責任だ。そんなものを背負わされて平然としているのは、まともな人間の精神ではない。だからこそ地球人は、神さまに自分をゆだねるのだ。兄さんは異常者なのだ。

しかしそんなことを訴えたところで、兄さんは変わらないだろう。それでも自分で道を選ぶことやめないだろう。誰かの示した道を、彼は嫌うのだから。

月の大気圏に船が突入する。しばらく地球とも月とも連絡が取れないという旨の放送が流れる。地球人としての、最後の時間である。これまでの人生が、走馬燈のように駆け抜ける。与えられたものを与えられただけ消費していた人生。そこには責任はなかったが、苦しみもなかった。これでいいのだ。

——それなのに、それでも兄さんは私を惑わす。

居室のロックが外部から解かれ、扉が開かれる。そこに立っていたのは、当然――

6 兄 船内居室女子区一六八前

三日間考えたが、妹を説得する方法は思いつかなかった。どうやっても、妹に逃げる意志を持たせる算段は付かなかった。俺にできるのは、ひたすらに自分の想いを語ることだけだった。それで妹を説得できなければ、無理やりにも連れていくしかない。そこまで覚悟していたのだが。

「わかった。わたし、兄さんと一緒に逃げる」

俺の拙い誘いに、妹は、簡単に折れた。

「兄さんが逃げた方がいいって言うなら、それに従う。二十年も私と一緒にいた兄さんが言うんだから、その判断は間違っていないんだと思う。だから、従う」

この答えは予想していなかった。てっきり妹は、そのまま神のものになることを選ぶと思っていた。

「良かったっすねセンパイ！ すんなり説得できましたよ！説得で十分くらい使うと思ってたんすけど、これなら！」

後ろでユダが馬鹿みたいに喜んでるが、これは俺の理想的な展開とは言い難い。俺が真に言いたかったのは、死ぬなどいうことではなく、自分で道を選び取れということなのだ。この妹

の返答は、俺の言うことに従順に従っているだけだ。依存先が神から俺に挿げ替えられただけだ。

「違うんだ。俺が言いたかったのは、そんな表面上のことじゃなくて――」

「何やってるんスカセンパイ！ 説得できたなら、早いと作戦を進めましょう！ 時間ないんスカから！」

ユダのセリフが俺の言葉を遮った。確かに、ここでどうのこの言っている暇はない。妹の哲学は、すぐに変えられるようなものでもないようだ。とりあえず今は、神の贄から逃れることが先決だ。

「じゃあ、ついてこい」

そうして歪みを抱えたまま、俺たちは船の機関部を目指した。

7 兄・妹 船内搭乗口

作戦はシンプルだ。

ユダが集めてくれた部品を使い完成したジャミング装置。それを大気圏突入の通信障害の隙に、通信室に設置する。そうして通信障害の時間を、三十分ほど延ばす。おそらく月への着陸も三十分ほど遅れ、船は空で一待機することになるだろう。

そして同時に、船のシステムに侵入する。自動操縦のシステムに介入し、搭乗口のみ、途中での指示変更ができないように

改竄する。そうすることで、空中で待機している間、本来なら着陸している時間に、搭乗口が開くはずだ。その隙に、空から飛び降りるのだ。この算段なら、俺たちが船内から消えたとしても、不幸な事故として処理される可能性が高いだろう。

作戦は順調に進んでいた。不気味なくらいに。懸念していた部分、ジャミング装置が作動するか、そして船が上空で制止するかなども、問題なくクリアできた。何か、それこそ神のような大きな力に助けられているとしか思えなかった。

予定通り、搭乗口が開く。月の地表が見える。高度は大体五千メートルだろうか。酸素は薄い。マスクがなければ致命的だっただろう。

「じゃあ、行くぞ。お前ら覚悟はいいか」

「……ええ」

「もちろんっすよ！」

こんな状況でも飄々としているユダはともかく、妹の顔は暗れていなかった。その表情からは、彼女が何を考えているかはわからない。俺に言われるがままに神から逃れようとする彼女は、一体何を思うのか。

しかし、悩んでいる暇はない。俺たちは、神の贄から逃れるのだ。月の神たちの消耗品としての人生から解放たれるのだ。

そうして俺たちは飛び降りた。月の空は、地球のそれよりも温度が低い。専用のスーツは用意していたが、寒さはそれをも貫き肌へ届く。しかし耐えられないというほどではない。すべては順調に進んでいた。後は月の地面に激突する寸前に、船の

疑似重力場発生装置に手を加えた、重力を反転させるための機器が作動し、無事着地できるはずだ。

五千メートルから落下しながら見下ろす月面は、地球と何ら変わらなかった。緑があり、山があり、海があり、街があった。神がいるからといって、天上の世界じみているわけではない。当然だ。月の神も、源流を辿れば俺たち地球人と同じになるのだから。

地面が近づく。そろそろ機器が作動する。着地点も調整しなくてはいけない。できるだけ月の神に見つかりにくいところ、行方不明として処理される可能性が高いところに落ちなければならぬ。

スカイダイビングよろしく、二人とハンドサインで安全を確認をする。意識ははつきりとしているか、機器はきちんと作動しているかを聞くと、どちらも問題はないようだ。よかった。このままいけば、無事に月へと降りられそうだ。

降りた後どうするかは、正直に言えば、考えていない。神に反旗を翻しテロを起こすか、人格を入れられた神の一人を装い新たな人生を送るか、他にも様々な選択肢が考えられる。しかし俺は、そのどれでもいいと思っている。どんな選択をしたにせよ、自部の頭で考え、自分で選んだ道ならば、それは誇れるものになるだろう。たとえその先に待つのが悲惨な死であろうとも、そこに後悔はないだろう――

と、俺が自由の先に想いを馳せていると、ユダが不意に動いた。

ユダは懐から小型の銃を取り出し、妹へ向けた。

「ッ！」

気がついた時には、すでに弾丸は発射されていた。幸い一発目は、落下の慣性地球と月の重力差により明後日の方向へ飛んで行った。しかしユダは冷静に、撃った反動で崩れた姿勢を立て直し、再び銃口を向けた。先ほどのずれから軌道を修正するのだろう。俺は急いで妹を守ろうとしたが、二発目は無慈悲に放たれた。

弾丸は、妹の腰につけられた重力反転機器を正確に打ち抜いた。

妹の落下速度が増加する。このままでは、妹の加速度は増し、地面に叩きつけられ死んでしまう。それだけは避けなくてはならない。このまま死んでしまえば、妹は何も選ばないまま死ぬことになる。神の贄になると何ら変わらない、己の意志の介在しない死だ。そんな形で、妹の人生を終わらせたくはない――

「カゲヤーツ！」

俺は妹の名前を叫び、手を伸ばした。妹もそれに答え手を伸ばす。妹の目は、これまでの諦観に満ちたそれとは違った。死を目前にした時の、恐怖と絶望の入り混じった目。そんなものを見てしまえば、見捨てることなんて絶対にできない。伸ばした手が二度三度空を切る。どうか、届いてくれ――

「兄、さんっ！」

妹が声をかからず。そして、手は届いた。俺は妹を引き寄せ、抱きしめる。彼女の瞳には涙がにじんでいた。

妹の無事を確認すると、俺は頭上にいるユダを見据えた。その目からは感情は読めない。ユダは追撃はせず、銃を懐にしまった。

ユダも捨て置けないが、今は早まる落下をどうするかだ。俺が改造した重力反転機器が機能するのは、地球重力下換算で八十キログラムまでだ。俺と妹の二人で落ちると、無事では済まない、どちらも死んでしまう可能性も大いにありうる。

俺はスーツから、小型の工具を取り出した。妹の反転機器は打ち抜かれた。しかし今なら、配線をいじれば直るかもしれない。俺は一縷の望みに向け、落下しながら修理を始めた。

これまでにない緊張感の中の作業だ。少しのミスが死に直結する。しかし、失敗するわけにはいかない。俺は絶対に死なない、妹は絶対に死なせない――

月面が無慈悲に迫っていた。
そして

7 兄・妹 月面荒野

月面直撃の直前、すんでのところで機器は直った。

落下の衝撃は八割ほど軽減され、何本か骨は折れているだろうが、俺も妹も死んではいなかった。妹はまだ目覚めないが、そのうちに起きるだろう。ホッとため息をつく。よかった。諦めなくて本当に良かった。

軋む体に鞭を打ち、起き上がって周りを見渡す。激突で巻き上がった土煙で鮮明には見えないが、どうやら荒野のような場所に見える山の端には、地球が沈もうとしていた。

そして、土煙がおさまった中であつたのは——ユダの姿であつた。

「あれ、二人とも生き残っちゃったんすね。これは予定外」

ぬけぬけと言うユダ。飄々とした態度は、まぎれもなくユダのものだった。偽物ではない。

「ユダ……お前、どうしてカダヤを撃った」

「そんなの決まってるじゃないっすか。妹さんを殺すためっすよ」

「だから、どうして殺そうと——」

「ボクらの月に、その女みたいなのは要らないんすよ」

悪びれもせず、表情も変えず、ユダは言い放った。

「待てユダ。お前今、『ボクらの』って」

「順序を追って説明するスね。お察しの通りボクは、もともと月の存在っす。ある目的のため月から地球に降りてきたんす」

雷に打たれたような衝撃が、脳天からつま先に突き抜ける。二年前にユダに会った時から今まで、俺は騙されていたという

ことか。

「シヨックっですよねえ。騙してたことについては、申し訳ないと思つてます。元々、センパイが月に無事つけばばらすつもりだったんすよ。こんな形になつてしまい、ボクも残念に思つてます」

脳内が疑問符で溢れかえる。もともと月の存在だったユダが、わざわざ地球まで降りてきてまでしたかったこととは何なのか。それが、妹を殺そうとしたことと何の関係があるのか。

「本来の計画なら、センパイが無事に月に着地して成功だったんズ。センパイみたいな、地球人を、月の神の座に祀り上げる。それがボクのやりたいことでした。それなのに、余計に妹がついてきた。だから殺そうとしたんす」

「そん、な」

「二十八世紀に、人類が月に移住し始めたことは知つてますよね。地球に住む人間と、月に住む人間とで二つに分かれた。その時、どういう基準で分けたか知ってますか？」

俺は小さく首を横に振る。俺も人類の歴史を知る中で、気にはなつていたところだった。人類の転換期。そのまま地球に住み続ける地球人と、月に移住する神の二つの派閥に、人々が分かれた時だ。しかしその基準は、文献やデータには残っていない。国籍にも人種にも民族にも宗教にも、共通点は見られなかった。

「それはですね、『自分で道を選べる人間か否か』なんすよ」

ユダは静かに言った。

「自分としての哲学があつて、自己としての意識がある。そういう、アイデンティティが確立した人間が、生きるべき、人類の未来を担うべき存在として、フロンティアたる月に住むことを許されたんす。そして、目的も意味もなく、ただただ無為に生きていだけと判断された人間は、月に選ばれた人間を、『贅』という形で援助するんす。引き換えに、幸福で安心で安全な、二十歳までの人生が約束される、っていう寸法ス」

俺の信じていた世界が、音を立てて崩れた。地球にいる人間が、不自然なほど生に執着しなかったのはそういうことだったのか。そういう人間だけが残され培養されたのが、地球という星だったのだ。

「しかしそれでもたまに、地球にも生きる意味を見つける人間が現れる。センパイのような、っすね。そういう人間を拾い上げて月に連れてくるのが、ボクの使命というわけっす。だから、妹さんは要らなかつた」

そうか。そうだったのか。それならば、脱走作戦が不自然なほどうまくいったのにも合点がいく。ユダが月の側に、様々な調整を施したのだろう。

「もちろん、全部手助けしたら意味ないんすよ。自分で道を選ぶ覚悟と、あとそれに見合う度胸も持っているか確かめたかつたんす。もちろん、先輩は合格、そして妹さんは——不合格ス」

ユダは再び、懐から小型銃を取り出した。

「じゃあ改めて、妹さんには死んでもらうっす」

かつた。

「そんなことは、させない。カグヤの生きる理由は、これから俺と一緒に探すんだ。だから、見逃してくれ。こいつもいづれ、生きる意味を見つけられるから——」

「んー、ダメっす。月が選ぶのは、二十歳までに自我を確立した人間のみっす。この、月に出荷されるまでの二十一年間は、育成期間であるのと同時に、モラトリアムでもあるんす。執行猶予は、もう過ぎたんすよ」

それでも俺は、妹をかばいユダに立ちふさがる。重力反転機器を破壊された時の妹の目は、確かに生きたいと訴えていた。誰であろうと、それを踏みにじることは許さない。

「カグヤを殺すというなら、俺を殺してからにしろ。お前が引き金を引いたなら、俺も反転機器を作動させ空に身を投げ自殺する」

月にとつて、きっと俺は失いたくない存在であるはずだ。地球にいたころ、自分とユダ以外に贅を拒む人間には会つたことがない。つまり俺のような意志持つ地球人は、相当レアなケースなのだろう。そんな俺が死ぬことは、月にとつても避けたいことのはずだ。そこから、交渉の糸口を——

「そうすか残念ス。じゃあ殺しますね」

事もなげにユダは俺に銃口を向け、弾丸を放つた。それはごく自然に俺の胸に吸い込まれ、心臓を貫いた。真つ赤な鮮血が

飛び散る。口内に鉄の味が広がる。

俺は膝から崩れ落ちた。そうか。俺は自分で思っていたほど、月にとつて重要な存在でもなかったらしい。自分の存在に自身を持つている人間は、こういったたと他の認識のずれに弱い。アイデンティティを持つていたことそれ自体が災いしてしまつた。

俺は、自分の死については後悔していなかった。ただ一つ、妹を守れなかったことが、悔やまれてならない。妹も守れないなんて、兄貴失格だ。

せめて死ぬ前にもう一度、カグヤの「生きたい」と訴える目を、生きる意味に気づきかけた彼女の姿を、もう一度見てみたかった――

8 兄妹 月面某国某地区病院

死んだはずの俺は、真つ白な部屋の、真つ白なベッドの上で目覚めた。

「――っ。なん、で」

俺は、ユダに撃たれて死んだはずだ。あの時確実に、「死んだ」という実感があつた。それなのに、俺はこうして生きている。身体に痛みはない。違和感があるとすればむしろ精神の方だ。自分ではない何かの存在を、心の中に感じる。

「お、起きたっすか。よかつたよかつた」

声の方を向くと、そこには俺を撃つた張本人、ユダの姿があつた。罪悪感のないあつげらかなとした顔で、椅子に腰かけ果物を齧っている。

「あ、このリングはボクが自分で買ったものスからね。センパイへのお見舞いとかじゃありませんので。あしからず。そもそも月には、センパイの知り合いなんてボクくらいしかいませんし――」

「カグヤを、どうした……!」

俺は身を乗り出し、ユダの胸倉を掴んだ。俺の生死は、さして重要なことではない。俺が撃たれた後、妹は一体どうなったのか。

「やだなあ、センパイ。そんな姿で言われても、ギャグにしかりませんよ。……ほら、あれを見てください」

不敵な笑みをこぼし、ユダは窓を指さした。窓の外には夜の闇と、煌々と輝く地球があつた。しかし何より異常だったのは、窓に映し出された俺自身の姿だった。

そこに映っていたのは、ユダの胸倉を掴む、カグヤの姿だった。

「ボクが撃つたせいで、センパイ死にそうだったから、早速月の神としての権利を勝手に使わせてもらつたんす。月の者は、不老不死のため二十歳を超えた地球人の肉体に意識を移す。常

識すね。だから今の先輩は、ボロボロになった元の身体から、一番意識移植がしやすかった妹さんの身体になつてるんす」

非情に告げるユダ。月面に着陸した時点で、俺はすでに月の神とやらに「成ってしまった」のだろう。そして自動的に、不老不死にされてしまったということか。

「それにしても、初めての『贅』が妹なんて、ついでつすねえ！月面広しと言えども、そんな数奇な運命をたどった人は初めて見たっす！」

げらげらと、下品に笑うユダ。怒りで脳が沸騰しそうになつた。こいつはどこまでも、俺と妹を馬鹿にしている。俺の代わりに死んでしまった彼女を笑うことは、絶対に許せない。俺は妹の細い手を、強く握りしめ拳を作つた。

その時のことだった。目覚めたときに感じた、自分の中の自分ではない何かが、俺に語り掛けてきた。

——私は、生きてる——

それだけで、声の主が誰であるかは明らかだった。

「あれ？ 殴らないんすか？ てつきり怒り狂つて、暴れるくらいのこととは思つたんすけどね」

なおも煽るユダ。しかし、俺は冷静さを取り戻していた。あいつは、死んでいない。俺の中で、微かに、だが確かに生きている。俺はユダから手を離れた。

おそらく、落下時にカグヤに自我が芽生えたのが原因なのだ

ろう。ユダの話を統合すると、普通人格を移植される地球人には、己の意志のない人形のような人間が用いられる。しかし彼女には、ユダに撃たれた時、恐怖から「生きたい」という自我が生まれていた。自我のある人間に月の神が人格を移せば、今の俺のように、一人の人間に二つの存在が同居している状態になるのではないか。俺はそう仮説を立てた。

俺は口を開く。

「……それで、月の神としての生活は、お前がサポートしてくれるのか？」

ユダは、船内で見せたのと同じような驚きの顔を見せた。

「思つてたよりすんなり順応するんすね。ええ。センパイを月に誘導したのはボクですから、そこは責任をもちましょう。これから何でも聞いてください。月のことに関しては——ボクの方がセンパイなんです」

ない胸を張るユダ。そうやってふんぞり返っているがいい。俺は決意を新たに固める。まずは、この月面世界に慣れるのだ。そして、あらかたこの世界のことがかれば、俺の中にいる「彼女」を、蘇らせる方法を探そう。月面には俺のように、元々の肉体の人格が残っている神も、いるかもしれない。

「じゃあ、行きましょう。肉体自体の怪我は、すでに治つているはずですよ。すぐにも退院しちゃいましょうか」

「ああ。これからよろしく頼むよ——先輩」

俺は、月面での第一歩を踏み出した。それは俺にとつては大きな一歩で——そして何より、地球と月の人類にとつても、と

んでもなく大きな一歩であった。後者の事実には俺が気づくのは、
ずいぶん先のことである。